

「地球市民を育てる授業開発と実践－生徒の学びに着目して－」

宮城県仙台東高等学校 教諭 石森 広美

1. 本論文の目的と研究方法

(1) 目的

本論文の目的は、公立の高等学校において新設した学校設定科目「グローバルシティズンシップ」(Global Citizenship「地球市民性」の意味、以下 GC) の授業概要(内容・方法・評価)および生徒の学びについて検証することである。GC は英語科選択科目として、平成 22 年度に勤務校の教育課程に配置された。

生徒たちは1年間の授業を通して何を学んだのか、また、その学びが授業終了後も活かされているのか。これらの事項を検討することは、グローバル教育の意義確認につながり、学校教育の場にグローバル教育を位置づけていく上で重要な資料となる。

(2) 研究方法

平成 22 年度および 23 年度の 2 年間の GC の授業実践を振り返り、形成的アセスメントの視点からおこなう毎時のワークシートや年度末におこなった自己アセスメントシートの記述を分析した。さらに、授業終了4カ月後の時点で実施したフォーカス・グループ・ディスカッション(参加生徒7名、90分)からさらなるデータを収集し、総合的な分析をおこなった。

2. 「グローバルシティズンシップ(GC)」の設計と評価

(1) 英語科・学校設定科目のねらい

勤務校は、英語科(各学年1クラス)・普通科(各学年6クラス)から成る公立の高等学校である。教育課程の再編に伴い、英語科独自の科目(2単位)を設立する必要性が生じ、授業開発にあたることとなった。英語科で学ぶ生徒だからこそ、英語でコミュニケーションを図る際、趣味や家族など身近な話題だけではなく、国際的な問題について自らの考えを発信したり意見交換したりできるよう、グローバルな視点からの英語コミュニケーション力をつけさせたい。また、相互理解を深める寛容の精神や多様なものの見方、異文化尊重の姿勢も養いたい。そのためには地球市民としての素養が必要であり、英語を媒体にしたグローバルイシュー(地球的課題)の学習はその涵養に資するものである。以上の見地から、「グローバルシティズンシップ」という新科目を構想し、授業設計をおこなった。

(2) GC の設計

GC の授業設計・評価にあたっては、英国などのグローバル教育の先進事例や先行研究の蓄積を参照し、次のような点を考慮した。まず、設計については、「知識・理解」「技能・スキル」「姿勢・態度・価値観」のグローバル教育の3つの目標領域を支柱とし、各領域に包摂される重要テーマを抽出し、できる限り幅広くバランスよく盛り込むよう配意した。表1は、開講1年目の簡易版年間計画(シラバス)である。

【表1】グローバルシティズンシップ（GC）概要（平成22年度シラバス）

学習のねらい ① 地球市民として視野を広げ、自覚と責任を高める。 ② 地球市民に必要な知識・理解(社会的公正,多様性,相互依存性,持続可能な発展,平和・対立等)を深める ③ 地球市民に必要なスキル(批判的思考力,他者への敬意,交渉力等)・姿勢(セルフエスティーム,多様性の尊重,環境への配慮等)を身につける。		
授業で身につけたい力 思考力、ディスカッション力、コミュニケーション力、多様なものの見方、問題解決能力、チームワーク等		
学習形態 ① 講義(大切なポイントの説明) ② グループワーク(意見交換・共有、ディスカッション、自らの意見をまとめ述べる、他者の考え方に触れる) ③ 参加型学習(アクティビティ・ワークショップ・ロールプレイ・ピアティーチング) ④ プレゼンテーション(自らの意見や調べたことを発表・発信する)		
学習のアドバイス ① 積極的に授業に参加し、自ら考え、意見を述べること。 ② 他者の意見に真剣に耳を傾け、それについてよく考え、自らの意見を整理すること。 ③ 地球市民として自分がどのようにあるべきか、常に振り返ること。		
使用教材 オリジナル教材など A4サイズのクリアファイルを用意し、授業で配布された資料や自ら調べたこと等をポートフォリオすること。		
評価方法 ① 前期中間考査:試験実施 ② 前期期末考査:レポート ③ 後期中間考査:試験実施 ④ 後期期末考査:プロジェクト発表 授業で使用するワークシート、課題、活動の様子、発言、プレゼンテーション等を総合して評価する。		
単 元 名	学 習 内 容	予 定 時 数
Introduction Social justice Human rights Globalization and interdependence 前期中間考査	導入:グローバルイシューとは 格差について考える(南北問題、貧困、ジェンダー、fair/unfair等) (例:世界が100人の村だったら、フェアトレード) 人権について(ちがいのちがい、子どもの権利) グローバルイゼーション(グローバル企業、グローバル社会) (例:コーヒー、えびとバナナ、チョコレート、グローバル化と文化・言語)	
Globalization and interdependence Self-esteem Value and respect for diversity (前期期末考査)	相互依存性(衣食住でのつながり、世界の出来事との関係) (例:食から世界が見える、ケータイの一生、コンビニなど) セルフエスティームを育てる(アイデンティティ、自己肯定感) 多文化共生とは(ひょうたん島問題、宮城の多文化共生) 多様性の尊重、異文化寛容、偏見に気づく	
Sustainable development Global issues (Millennium Development Goals) Peace and conflict 後期中間考査	環境問題・持続可能な発展について考える (例:ESDの理念、パーム油のはなし、水問題、地球温暖化等) MDGs(ミレニアム開発目標) 紛争・対立について、平和的解決方法(例:ホーポノポノ)	
Self-initiated project What is a global citizen? (後期期末考査)	プロジェクト:ローカルとグローバルをつなぐ諸問題を掘り下げ、グローバルシティズンとして自らがすべきことについて考え、発信する。 まとめ:グローバルシティズンとは? 自分の役割とは?	

授業の中核的構成要素である①教授・学習内容、②教授・学習方法、③評価・アセスメントは、目標や意図された成果に規定され、相互に連動性を持つ必要がある。上記のシラバスでは、グローバル教育に不可欠な人権、平和、環境、開発などのグローバルイシューを基軸とし、多文化共生や ESD などの近年の重要概念を学習テーマに取り入れた。基礎的な知識やものの見方、思考力、問題構造の把握等の力が身につけていないまま調べ学習に取り組ませても効果は希薄であると考え、前期でそれらを学んだ後、後期の最後に学習の総括として自己主導型プロジェクトを位置づけている。

また、高校の授業では一般的であるレクチャーは導入とまとめの段階にとどめ、生徒中心のグループワークやディスカッションなど参加型学習の形態をとった。そして、教師は教え込むのではなく、生徒に問題提起や鍵となる質問を投げかけ、個々の考えを引き出し、意味づけし、全体で共有するファシリテーターの役割を果たした。

(3) GC の評価

グローバル教育の評価については十分な検討がなされておらず、多くの実践者が悩んでいるのが現実である。グローバル教育は長期間にわたりその成果や影響が浸透していくものであり、広範囲に及ぶ包括領域や取り扱う問題が複雑に絡み合う性質上、評価方法についても総合的あるいは重層的にならざるを得ない。したがって、多様な評価アプローチを採用することが妥当である。同時に、GC を独立科目として安定的に教育課程に定置させるには、適切な筆記試験の考案も必要である。

こうした理由から、筆記（定期）試験、レポート、発表、自己評価、振り返りシート、ワークへの参加姿勢、ポートフォリオなど多角的方法で材料を集め、総合的に評価している。また、筆記試験については、単なる記憶再生型の画一的テストではなく、既習事項を基盤に考えを深めさせる統合型・問題解決型の総合問題となるよう工夫している。このような考査は作成と採点に労力がかかるが、グローバル教育の理念からも重要なことである。また、教師による適切なフィードバックも生徒の学びを確かなものにし、次なるステップへと導くのに欠かせない。授業中に生徒のコメントを拾い上げておこなう適時の口頭フィードバック、そしてワークシート上での個々の生徒へのフィードバックは、生徒の学力向上の確認および学習支援の優れた技法である。

3. 生徒の学びの検証

グローバル教育は既存の価値観や固定されたものの見方に揺さぶりをかけ、新たな視点や思考を生み出すインパクトを与える。授業を重ねるにつれ、次第にワークシートには問題構造への関心や論理的思考力の高まりを示す内容がみられるようになった。

1年間授業を受講した生徒の記述分析から、GC の成果、生徒の学びはおよそ次の5つに分類できた。「自分と世界とのつながり・関連」「思考力・探究力・知的好奇心や関心の向上」「広い視野・多角的視点」「人間関係構築スキル・寛容の精神」「自己探求・自分のあり方や生き方」である。また、実際には付随する複合的な学びが生起している。下記のコメントはそれを裏付ける。

- 大学に進学するつもりは全くなかったのに、GC で学んだことをもっと勉強したいので、大学で深く学びたいです。そして、地球の様々な問題を多くの人に知ってもらって、解決に向けて少しでも前進したいです。この授業に本当に感謝しています。
- 毎時間自分の視野が広がっているのが感じられ、自分自身が成長していっているのが一番感じられる授業でした。
- この授業はこれからの未来をつくる私たち生徒にとって、どの教科よりも大切だと思います。無知であることの怖さも実感しました。もしこの授業を選択していなかったら、一生知らずに生活していたと思います。
- 習得した知識やスキルはもちろんですが、自分自身の心の変化が一番の成果だと思います。自分の中の世界観・人生観が広がりました。世の中で起こっている一つ一つに意味があり、それを理解し、解決に向けて考えを導く、このような姿勢や広い視野をもって行動する力もつきました。
- 発言の機会が多いので、自分の意見を言えるようになったし、他人の意見も聞き入れられるようになりました。自分に自信がつかえました。
- 世界の現実を知ること、これからの自分のあり方について深く考えることができるようになりました。人が人を苦しめて、壊していることに気づかない人もたくさんいます。私もそうでした。だからこそ、知り、学び、考え、行動に移すことがとても大事だし、私たちがすべきことだと分かりました。

さらに、1年間のGCの授業終了後4カ月が経過した時期にフォーカス・グループ・ディスカッションを実施した結果、生徒たちにはその学びの核心部分が残りと、その後の学習や生活に活かされているとわかった。獲得された学びは多岐にわたっており、知識・理解領域にとどまらず、むしろそれを超えて、様々なスキルや姿勢・価値観などに及んでいる。例えば、「初めて会った人が自分と違う価値観を持っていても、否定しない自分になった」「何かを考えるとき、自分だけの視点ではなく、相手の視点、第三者の視点からも考えられるようになった」「知ることが楽しくて、どんどん自分で本を買って読んだりする」「いろんなことを頭の中でつなげて考えるようになった」「大学で学びたいことが見つかった」「普段の悩みがちっぽけに感じる」「相手の立場を想像できる、痛みを共感できる」「生きる喜びを感じる」「学ぶ意味や大切さを知ったから、勉強が楽しい」「GC で学んだことが他教科でも活かされている」等、学びは授業終了後も多方面に発展している。

以上のことから、GC での学びは、応用可能な力強いスキルとなって本人に根付いていくことが明らかとなった。

4. まとめー成果と課題ー

上述したように、1年間継続してグローバル教育の授業を受けた生徒には、学びの深まりや人間的な成長がみられる。この点で、次のような生徒のたちのコメントは印象的である。

「国語・数学・理科・社会・英語は国公立や難関大学を目指すには確かに必要な教科だが、GC の

ように世界の『今』を学べる教科は他にない。私はただ詰め込みだけの勉強をしてきた人より、現代社会に目を向け、グローバル 이슈を考え、国際理解を深めた人の方が将来魅力的な人材になると思う。「ただ周りが行くからといって何となく大学に行く人よりも、学ぶ喜びと学びたいことを見つけた人が大学に行くのでは、吸収力が全然違うと思う。私は GC で学ぶ楽しさを知ったので、大学でもたくさんのお話を吸収したい」。「この授業で自分自身大きく成長できた。17 年間という人生の中で、大きく人生観が広がった。一つの物事は幾つもの物事とつながっている。人間にも同じことが言える。「輪」や「つながり」をものすごく考えさせられる 1 年だった。自分を信じ、さらに様々なことに挑戦したい。毎日に感謝し、大きな人間になる」。

GC 受講生徒には、授業で扱ったテーマや学習を大学の AO 入試や推薦入試の際の小論文や面接などで活用する場面が多々見られた。また、授業で学んだことを発展させ、エッセイコンテストや英語スピーチコンテスト、国際理解弁論大会などで自らの考えを発信する生徒もいた。そして、多くの生徒が人の役に立てる人間になりたいと話し、目的意識を明確にして勉学に励んでいる。

グローバル教育からの学びは、数値には表れない内面の質的变化であり、「生きる力」や人間関係構築スキル、人生設計スキル、多様なものの見方、寛容、知的好奇心や探究心など、生涯学習の基盤となり、人として社会の中で生きていく上での包括的なライフスキルである。性急な結果を求めがちな現在の学校教育において、ここに示された生徒たちの学びの証は、教育の本質を考える上で示唆的である。

今後の主な課題は、グローバルな学習の継続を支援する体制づくりの問題である。授業を通して芽生えた生徒の問題意識や関心を持続発展させるための共通理解やシステム構築が重要である。生徒たちは GC の授業のように世界の問題と自分たちの生活を関連させて語り合い、考える場の継続を望んでいる。平和的な雰囲気と安心感のある教室で、仲間と活発に議論し合い、共に学び合うことが可能な授業、それこそが生徒の学習意欲や思考力を伸ばすこと可能とする。裾野を拡大する啓蒙活動と併行して、関心の目が開いた生徒への継続的支援や、学校全体による地球市民意識涵養の方策が求められている。